

# 南宋略論

何 忠 礼<sup>※</sup>

訳 甲 斐 雄 一

南宋朝（1127-1279）153年、中国は政治、経済、文化、科学技術の各方面において優れた成果を得た。しかし後世の人々は文化的発展をやや首肯するのみで、全体的な評価は低い。南宋は安逸にふけり進取の気概に欠けると責められるのでなければ、専権宰相が力を振るった腐敗した王朝で、軍事的にはよいところが一つもないと評されてきた。

筆者が思うに、確かに南宋の軍事力は高くなく、最後にはモンゴルに滅ぼされる運命を免れ得なかったけれども、版図広大たる大帝国の漢や唐と並べて論じるべきではない。確かに南宋では多くの役人の不正によって平民の負担は重く、漢の「文景の治」や唐の「貞観の治」、「開元の治」のような太平の治世は訪れなかった。けれども、漢・唐が強大な国家として版図を拡大した背景には「辺庭の流血海水を成す（杜甫「兵車行」）」と詠われるような、痛ましい代償があったのであり、それは労働階級の人民からすれば空前の大災害のようなものであっただろう。ほどなくして漢・唐の国力が弱まれば、統治集団の腐敗と内部矛盾の先鋭化が進み、かつて威厳を誇っていた帝王も外戚や宦官、あるいは重臣や軍閥に翻弄され、命すら奪われてしまう。そして民衆が蜂起し、軍閥が割拠して国家は衰退しさらには崩壊に至るのである。このような状況は、実は南宋史上には見られないものである。南宋が常に後世から批判される軍事力の脆弱さ、租税の重さはもちろん軍人を強く制御したことと関連する。だが、より直接的には、安定した支配体制の下、強大な軍事力を有した金とモンゴル（元）という敵国に対抗すべく、財政収入のほとんどを軍事に費やさねばならなかったことに起因するであろう。結果南宋の財政は厳しく、民衆からの搾取が増大したのである。知ってか知らずか、歴史家たちはこのことに触れてこなかった。南宋の後世に対する良い影響に至っては、明清以来、古に寓して今の世をそしる者に低く見られまた曲解され、一部の歴史小説がそれをさらに煽り立てた。

今に至るまで、筆者を含む多くの学者たちが事実即して南宋史を記述し、南宋の真実を復元せんと真摯に研究を進めており、その成果は陸続と形になっている。本稿は浅学を顧みず、これらの成果に拠って南宋の政治、経済、文化、科学技術と思想の各方面について概説を試みるものである。至らぬ点については、大家のご叱正を乞いたい。

## 一 南宋の安定した政局とその原因

南宋史において、前後して現れた秦檜・韓侂胄・史弥遠・賈似道の四人が権柄を執った時期は、併

※ 浙江大学歴史系、杭州市社会科学院南宋史研究センター

せて70年もの長きに及んでいる。これは南宋期の5分の2余りを占めており、南宋政治史における大きな特徴と言え、史学者のなかには南宋の政治を「専権宰相政治」と呼ぶものもいるほどである。しかし、この「専権宰相政治」は迫られてそうなったのではなく、みな当時の皇帝の要請に因るものである。例えば、高宗が秦檜を宰相に据え続けたのは、対金政策の方向性が一致したためであり、寧宗が韓侂胄を、理宗が史弥遠を、そして度宗が賈似道を重用したのは自身が軟弱で無能であり、彼らに多くを頼ったためである。あるいは政権を掌握した彼らに対し恩に着せることで、統治体制を堅固にしたかったのであろう。しかし、いかに宰相が思うまま権力を振るい、その期間が長期にわたったとしても、皇帝権力は一貫して他者の手に落ちることはなかった。それどころか、ひとたび皇帝の信任を失えば、彼らはたちまち力を失ったのである。

漢・唐の際にしばしば起こった後宮の妃嬪、皇族、外戚、宦官等による権力闘争や軍人の反乱、そして大規模な民衆蜂起、これらは南宋期にはあまり発生しなかった。よって、最も暗愚な皇帝であっても、無為にして治められたのである。南宋の統治がこのように安定していたのは、士大夫の忠誠、各政治勢力の拮抗、民衆の政権に対する求心力、思想や文化の薰陶等に拠るところがあったからである。しかし最も重要な原因であったのは、政治において祖先からの家法を継承してきたことであろう。

では、南宋が受け継いできた祖先からの家法とは何だったのか。まず、北宋の太祖・太宗兄弟が確立した文を重視し武を抑制する国策の大綱を徹底したことが挙げられる。南宋の初め、金軍の度重なる南下に伴って強盗や盗賊が横行し、軍事情勢が一変したことで国家の命運は風前の灯火であった。こうした状況において、軍を率いる武將は軍事はもとより、政治・経済の方面においても権力を発揮するようになった。甚だしきは反乱を起こし、南宋政権の直接的脅威となっていた。このため、高宗は内外の情勢がやや好転した紹興7年（1137）より文を重視し武を抑制する、換言すれば文を以て武を統べる祖先からの家法の再構築に着手した。この後三大將（岳飛・韓世忠・張俊）の兵権を回収し岳飛を殺害するのは、もちろん金との講和のためでもあるが、主目的はむしろ文を重視し武を抑制する祖先からの家法を再び遂行することにあった。この他、出兵権と統率権との分離や、武臣が政治に参与できない等の一連の政策も徹底して行われた。

次に、台諫の役割の強化が挙げられる。南宋は北宋同様、中央で台諫制度と封駁制度を実施したが、これは地方の監司制と呼応して、宰相を含んだ中央から地方までの各階級の官僚、さらには君主の権力までの監督を全面的に強化した。台諫職の役割を充分発揮させるべく、朝廷は彼らに以下のような多くの特権を付与した。第一に、「風聞の言事を許すとは、その言の由来を問わず、またその言が事実でなくてもよいということである。もし他の官僚が事実でないことを奏すれば、誣告及び偽りを上書した罪を問われるが、諫官・御史は事実に基づかずとも罪には問われない（許風聞言事者、不問其言所從來、又不責言之必實。若他人言不實、即得誣告及上書詐不實之罪、諫官・御史則雖失實亦不加罪）」<sup>1)</sup> という特権である。第二に、皇帝に対し諫言でき、詔勅に対しても起草の拒絶や認可の拒否が許されていた。第三に、台諫官は言事において独立しており、皇帝や宰執の指示を受けなかった。第四に、監察や諫言によって罪を得た官僚が処罰されることは稀で、左遷された場合でも後また重用されることが可能であった。これは専権宰相期においても例外ではなかった。これらの特権によって、「九品の青衫」にすぎない台諫職は皇帝の抜擢を経て「即ち権は宰相より重し（即権重宰相）」<sup>2)</sup> とされ、法をゆがめ収賄に走り、徒党を組んで私利をむさぼるような官僚の不正に対し一定の抑止力を有し、皇帝権力にすら一部制約を加えるほどの働きをしたのである。

1) 李燾『統資治通鑑長編』（以下『長編』と略称）巻210、  
熙寧三年四月壬午の条（中華書局点校本、2004年、  
5106頁）。

2) 黄震『古今紀要逸編』（『黄震全集』所収、浙江大学出版  
社整理本、2013年、3303頁）。

第三に、異論の対立でかき乱す策略がある。宋の真宗は「唐王朝は朋党が甚だ盛んで、王室を弱体化させるに至った（唐朝朋党甚盛、以至王室卑弱）」<sup>3)</sup>と言った。ゆえに宋の皇帝は、官僚の朋党の形成を一貫して忌避した。事前に防ぐ措置として、上述のように台諫を用いて官僚を厳しい監視下に置いたほか、朝廷において一つの勢力のみが力を伸ばすことを許さず、対立しうる勢力に援助し、互いに監督・牽制させあい、折を見て敵対勢力の無法な行いを摘発させるのである。こうした政策によって、朝廷には後世に朋党の争いと評される二大勢力の対立がしばしば起こった。事実、宋代の朋党の争いのほとんどが、政治的立場の違いから衝突している。最高統治者が政治的バランスをとり政権を安泰にするために誘導した党争すらある<sup>4)</sup>。このような異論を対立させる統治手法は、後世にも深刻な影響を及ぼした。

第四に、科挙による官吏任用を推進し、士大夫に大きな発言権を与えた。南宋は、北宋以来の家柄や所有財産を問わない科挙による人材登用をさらに徹底し、農民の家柄や屠畜業の者にすら科挙の受験資格を与えた<sup>5)</sup>。南宋の国土と人口は北宋から半減したが、科挙合格者数はむしろ北宋より増えており、進士出身者が南宋官僚機構の主体となって、中央から地方まで各階級の長官は彼らによって占められた。北宋期には進士出身でない者が宰相に任命されることもあったが、南宋には一例も確認できない。つまり、南宋こそ真に皇帝と士大夫の共同統治下にあった社会と言えるだろう。当時は言論規制も厳格ではなく、士大夫の発言権はより拡大された。一例を挙げると、光宗が病死した孝宗の葬儀を執り行おうとせず、宋王朝が危機に瀕した際に、趙汝愚や韓侂胄等の重臣はなんと光宗を廃しその子趙昀に位を継がせるという大胆な提案をし、太皇太后の同意を経て実施し南宋の政局を安定させている。また国力が日増しに衰えていた端平元年（1234）元日に、理宗が「直言を求む」との詔を下した。そこで参内した太常少卿の徐僑の衣服がボロボロのなのを見て、理宗は「卿はまさに清貧であるな（卿可謂清貧）」と言葉をかけた。徐僑が「私は貧しくありません、陛下こそ貧しくいらっしゃる（臣不貧、陛下迺貧耳）」と答えたので、理宗が「朕がどうして貧しいのだ（朕何為貧）」と尋ねると、徐僑はこう答えた。「陛下は国家の基礎を未だ固めないうちに、敵国の圧力は切迫し、寵臣が権力を持ち、将帥に人材はおりません。早魃や蝗害は絶えず、盗賊も相次ぎ、出費もきりがなく国庫は空です。民は徴税の濫発に苦しみ、軍は収奪に不平を抱いています。群臣が徒党を組んでいるのに陛下は孤立し、国運が危殆に瀕するのに陛下はご存じない。ゆえに私が貧しいのではなく、陛下が貧しいのです。……陛下はこれらの事態を顧みず楽しみにふけておられる、名医の扁鵲が看ても去って行ってしまおうでしょう。（陛下国本未建、疆宇日蹙。権幸用事、将帥非材。早蝗相仍、盗賊並起。経用無藝、帑藏空虚。民困於横斂、軍怨於培克。群臣養交而天子孤立、国勢阽危而陛下不悟。臣不貧、陛下乃貧耳。……陛下此之不慮而耽樂是從、世有扁鵲将望見而却走矣。）」<sup>6)</sup>理宗はこれを聞いて返事ができず黙ったままであった。趙汝愚等の政治行動や徐僑のこの「直言」は、後の明清期にはおそらく起こりえないであろう。南宋士大夫の積極的参与は、当時の政治に大きな活力を与えていたのである。

第五に、法制度の整備を重視し、民事も刑事も法に則ろうとした。南宋の統治者は法制度の整備を重視して、北宋の『宋刑統』や『編敕』等の法律を基礎に更に多くの法律を定めた。孝宗淳熙7年（1180）、「士大夫の法律に通じている者は少なく、吏が法を乱用している（士大夫罕通法律、吏得舞文）」現状を踏まえ、新たに法規集『条法事類』が編まれた。これは法律の条文を勅・令・格・式に排列し、「分

3) 『長編』巻113、明道二年八月丁巳の条（2634頁）。

4) 孝宗は譲位する前に、腹心である周必大を左丞相に任命しながら、一方で周必大と「議論素より相合わず」とされた留正を右丞相に抜擢している。『兩朝綱目備要』巻1、淳熙十六年五月の条（中華書局点校本、1995年、8-10頁）を参照。

5) 『名公書判清明集』巻14「宰牛者断罪拆屋」（中華書局点校本、1987年、535頁）。

6) 『宋史』巻422、徐僑伝（中華書局点校本、1977年、12614頁）。

門して編纂した（随事分門、纂為一書）」もので、「これを参照すれば全て分かり、吏に欺かれることがない（遇事悉見、吏不能欺）」ことを目的とした<sup>7)</sup>。『淳熙条法事類』の後、『慶元条法事類』及び『淳祐条法事類』も編纂された。これらの『条法事類』の部門は多いもので400門以上に及んでおり、当時の社会生活の各方面に行き届いていたと言えるだろう。

第六に、後宮の妃嬪・皇族・外戚・宦官による政治への干渉、大臣との内通を厳しく禁じ、内患が起るのを巧みに防いだ<sup>8)</sup>。

第七に、人民の生活に意を注ぎ、様々な措置を講じて社会問題を緩和している。これについて、以下三つの方面に分けて論じたい。その一つは、被災者の救済の重視である。『宋史』食貨志には以下のような記述がある。

宋之為治、一本於仁厚、凡振貧恤患之意、視前代尤為切至。諸州歲歉、必發常平・惠民諸倉粟、或平價以糶、或貸以種食、或直以振給之、無分於主客戸。不足、則遣使馳伝発省倉、或轉漕粟於他路。或募富民出錢粟、酬以官爵、勸諭官吏、許書曆為課。若拳放以濟貧乏者、秋成、官為理償。又不足、則出内蔵或奉宸庫金帛、鬻祠部度僧牒。東南則留発運司歲漕米、或数十万石、或百万石濟之。賦租之未入、入未備者、或縱不取、或寡取之、或倚閣以須豊年<sup>9)</sup>。宋の政治は仁厚の心に基づき、貧者や被災者の救済については、過去と比べても最も手厚い。諸州に凶作の年があれば、必ず常平倉・惠民倉より穀物を出し、適切な価格で売ったり、種もみや食料として貸し付けたり、あるいは直ちに救済として主戸・客戸を問わず与えたりした。不足があれば、使者を遣わして省倉から出させ、または他の路から転送させた。もしくは富裕な民に金銭や穀物を募って官爵を与え、その説得に当たった官吏には、昇進考査における功績とした。もし前貸しで貧民を救った場合には、秋の収穫時に官が不足を補償した。それでも足りなければ、官の内蔵・奉宸庫から金帛を出し、祠部管轄の僧尼身分証を売りに出した。江南は、発運司の歳漕米を数十万石から百万石備蓄して救済に充てた。租税が払えない者には減免し、あるいは猶予を設けて豊作の年を待った。

賛美が誇張されている面はあるとしても、宋代、とりわけ南宋期の貧民や被災者への救済は手厚く、史書の多数の記載にそれは確認される。

その二つは、民間の生活苦に対する施策である。紹興23年（1153）7月、高宗は高利貸しの横行に対し、「民間の借金をして利息が元本を超えている者は、法に照らしてこれを免除する（民間所欠私債還利過本者、并与依条方除）」<sup>10)</sup> という詔を出し、負債者の負担を軽減した。飢民には粥を施し、真冬には貧しい農民の家賃を減免し、病人には医薬を施し、死亡して引き取り手のない者を埋葬してやっている。このほか老人や幼童を慈しむ政策にも見るべきものは多い。例えば、孝宗淳熙3年（1176）、知蘇州の陳峴は身寄りのない老人や子供を收容すべく、居養安濟院を再建している。

為屋六十有五、為楹三百有十、為室三十、長廊還礎、対関列序、集癯老之無子妻、婦人無夫親者、分処之、幼失怙恃、皆得捨焉。籍官民疇千六百六十畝、募民以耕、歲得米七百石有奇、傍著三廩、浚二井、庖捨蔬間食用寓具、拳無一遺。又立僧坊主其供、病給医薬、死給槨、入叢塚以葬<sup>11)</sup>。

屋根は六十五、柱は三百十、部屋は三十、長廊は礎をめぐり、関に対して並び、老いた病人で子や妻のない者、婦人の夫や親のない者をそれぞれ住まわせ、父母を失った幼童もみな收容した。

7) 『玉海』巻66（清光緒9年浙江書局本の影印、広陵書社、2007年、1263頁）所収の『淳熙条法事類』及び『条法枢要』を参照。

8) 拙著『南宋政治史』前言（人民出版社、2008年、5-6頁）を参照。

9) 『宋史』巻131、食貨志上六（4335-36頁）。

10) 李心伝『建炎以来繫年要録』（以下『繫年要録』と略称）巻165、紹興二十三年七月己丑の条（中華書局昷商務印書館『国学基本叢書』重印本、1981年、2691頁）。

11) 「重建居養安濟院記」、『吳郡文粹』続集巻8（文淵閣『四庫全書』本）。

官民の田畑千六百六十畝を借り上げ、人民を募って耕作させ、一年に米七百石余りを収穫し、傍らには三つの倉、井戸を二つ掘り、台所等の食や設備全て揃っている。また僧坊を建てて世話をさせ、病人には医薬を施し、死者には葬儀を出し、大きな塚に葬ってやった。

救済の規模の大きさ、設備の充実ぶりは今日においても感嘆すべきものがあるだろう。

その三つは、飢饉の際の募兵政策である。太祖は「百代の後も利益をもたらすのは、軍備だけである。凶作飢饉の年には、民は叛き兵は叛かない。天運悪く変が生ずれば、兵は叛き民は叛かない（可以利百代者、惟養兵也。方凶年飢歳、有叛民而無叛兵。不幸樂歳而変生、則有叛兵而無叛民）」<sup>12)</sup>と考えた。南宋朝もこの凶年に募兵を行う政策を継続して行った。例えば理宗開慶元年（1259）の冬に「射陽湖の飢民が徒党を組んだ（射陽湖飢民嘯聚）」が、兩淮制置使、知揚州の杜庶が「將を遣わして兵士になるよう説得し、若者一万人余りを軍に組み入れ、悪辣な首魁数人を死刑に処するにとどめた（遣將招刺、得丁壯万余、戮止首惡数人）」<sup>13)</sup>大規模な民衆反乱をすぐに収束させたのである。

これらの三つの政策によって、社会問題は一定の水準で解決され、民衆の南宋政権に対する求心力は高められた。これこそが南宋社会を安定させた大きな要因であろう。

## 二 南宋の経済発展と後世への貢献

南宋初年、およそ14年にわたる金との戦闘状態を経て、社会は少しずつ安定していった。そして華北や中原の人民は戦乱を避け、または金朝の統治下にあるを潔しとせず続々と南へ遷った。莊綽が「建炎年間の後、江・浙・湖・湘・閩・広の各地域には、西北から寄寓してきた人で溢れかえった（建炎之後、江・浙・湖・湘・閩・広、西北流寓之人遍滿）」<sup>14)</sup>と述べるとおりである。臨安府を例に見ても、南宋には移民都市となっており、遅くとも紹興26年（1156）までには、北方移民を中心とする外来の人口は全体の7,8割を占めていた<sup>15)</sup>。元来人口が少なかった兩広地域も、戦場から離れていたことから人々が難を逃れる楽土となり、「当時の中原の士大夫の多くが戦乱を避けて嶺南にあった（時中原士大夫避乱者多在嶺南）」<sup>16)</sup>という状況であった。

北方人口の大量南下と生産技術の移入は、南宋の農業生産力を飛躍的に発展させた。労働力について言えば、光宗紹熙元年（1190）には全国で12,355,800戸あり、仮に5人で1戸として計算するとおよそ6,177万人を数えられる。これは漢や唐の最高人口を超えている<sup>17)</sup>。同時期の金朝は約768万戸、4581万余りの人口で<sup>18)</sup>、南宋よりも随分少ないのである。食料生産量で言えば、南宋は水利工事と耕作技術の向上に注力したうえに、稲と麦の二毛作が普及したことで、単位面積当たりの食料生産量は顕著な増大をみせた。唐代の上田の一畝当たりの生産量は二石に満たない程度であったが、南宋の江東・兩浙地域の上田は一畝当たり五、六石の収穫があり、唐代の二倍以上になっている。さらに大規模の荒地を開墾したので、食料生産の総量も大幅に増加し、「蘇湖熟すれば、天下足る」<sup>19)</sup>ということわざが生まれた。蘇州・湖州地区が南宋の食料庫となってより、元朝では福建や江西等の地域もまた重要な食料生産地となった。当時の全国の徴収した食料は12,114,708石だが、そのうち江浙行省は4,494,783石で、全体の37.1%を占めている<sup>20)</sup>。南で生産した食料を北へ送る方式が元代既に確立されていたことを示しているが、その基礎は南宋期に固められたのである。

12) 晁説之「元符三年応詔封事」、『嵩山集』巻1（文淵閣『四庫全書』本）。

13) 『宋史』巻412、杜杲伝付杜庶伝、12384頁。

14) 莊綽『鷄肋篇』巻上（中華書局点校本、1983年、36頁）。

15) 『繫年要録』巻173、紹興二十六年七月丁巳の条（2858頁）。

16) 『繫年要録』巻63、紹興三年三月癸未の条（1084頁）。

17) 王心麟『玉海』巻20「戸口」（文淵閣『四庫全書』本）を参照。

18) 『金史』巻46、食貨志（中華書局点校本、1975年、1036頁）。

19) 高斯得「寧国勸農文」、『恥堂存稿』巻5（文淵閣『四庫全書』本）。

20) 『元史』巻93、食貨志（2360頁）。

さらに、農業生産力の増大と北方の職人の南下に伴い、南方の手工業生産も新たな段階を踏んだ。資源の限界から、製錬業が大きく発展しなかったほかは、その他の生産業はほぼ全て北方を凌駕したと言ってよいであろう。もともと開封にあった公私の手工業の工房が移ってきたため、臨安府は南宋最大の手工業の中心となった。なかでも、紡績業は重要な手工業の一つで、その規模と技術力は同時代の金朝をはるかに超越していた。以降、南方は中国の絹織物業が最も発展した地区となる。

北宋では、磁器生産の中心は北方であった。定窯（河北定州）・汝窯（河南臨汝）・鈞窯（河南禹県）・官窯（河南開封）と景德鎮窯（江西）が北宋当時の五大名窯である。しかし、北方を失った後、河北河南の四窯はみな失われ、落ちぶれてしまったが、それと相反して南方の磁器生産は急激に発展した。最も有名な臨安府の官窯は、皇室から民間までを対象に大量の青磁器を生産した。北宋期に新興した龍泉青磁は、南宋に入って大きく発展し、生産された青磁は大量に輸出された。景德鎮の磁器窯は南宋当時300箇所余りに増加し、青と白の磁器は造形が美しく、釉薬の質感は宝玉のようであったため「饒玉」の美称を得、後に「磁都」と称される土台を築き上げた。このほか、広東や福建等の磁器生産も対外貿易の刺激を受けて急速に発展した。2007年12月に広東の陽江の海底から引き上げられた沈没船「南海一号」から、紹興年間に龍泉・福建・広東等で制作された多数の陶磁器が発見されたことは、これらの証明となるであろう。

また、造船業、製紙業、印刷業等もやはり北宋とは比べものにならないほど大きく発展した。金朝統治下の北方と比べてもその差は歴然としている。

これらの発展をもとに、南宋の商品経済は隆盛を極めた。都市の賑わい、商業の繁栄、海外貿易の空前の活況にそれを見ることができる。南宋最大の都市である臨安府は、咸淳年間（1265-74）には市街区（錢塘・仁和二県）のみで186,330戸を数えたという。1戸5人で換算すれば931,650人、これに流動人口を加えれば、都市全体では約140万人が生活していたことになる。臨安では店舗が林立し、商品の種類も多く、売買は昼夜を分かたず行われた。14-16世紀のヨーロッパはルネッサンスの時期に当たるが、当時最も有名な大都会・ロンドンの人口も3万4千ほどにすぎなかった。マルコ・ポーロが杭州にやって来て「その目に触れる一事一物の豪勢さに驚嘆の眼を見張っている」<sup>21)</sup> というのもうなずけよう。明州・紹興・平江・建康・成都・福州・泉州・広州・長沙・荊南（湖北江陵）・沙市・襄陽・興元（陝西漢中）等の都市も繁栄し、宋と金の前線であった鄂州でさえも「商船や客船は数え切れないほどで、船と船が連なって何里も続いている（買船客舫不可勝計、銜尾不絶者数里）」、「都市は繁盛していて、店がごちゃごちゃと立ちならぶ。城外の南の市場も数里の長さ。錢塘や建康でも敵わない、隠れた大都会の一つである（市邑雄富、列肆繁錯、城外南市、亦数里。雖錢塘・建康不能過、隠然一大都会也）」<sup>22)</sup> と記されるような賑わいであった。

これらの発展に加え、造船及び航海技術の進歩を背景に南宋の海外貿易は空前の繁栄を見せた。茫漠たる大海はもはや中国の外部発展に対する天然の障壁ではなく、大量輸送と迅速な移動を可能とする海上交通路となったのである。明代に鄭和が挙行した大航海は、この時期の航路を用いて成し遂げられたものである。大量の商品が、数百から千トンを積載する船に載って世界各地へと向かった。その盛況は、「大波遙かなるも、平坦な道を行くかのよう。財宝雜貨が市場に並ばない日はなく、公庫はみな充満している（鯨波万里、如履坦途。雜貨瑰宝、将日陳于斯庭、而帑藏無一之不充矣）」<sup>23)</sup> と評される。「蛮賈蕃商」も交易を目的に陸続とやって来たため、広州や泉州等の港町には蕃坊が設けられ、大きなモスクも建てられ、そこで生活した外国商人はアラブ人を中心に数万人を数えた。現代

21) 池田静夫『中国水利地理史研究』（日本生活社、1940年、316頁）を参照。23) 『宝慶四明志』卷6「市舶」（『宋元方志叢刊』所収、中華書局、1990年、5054頁）。

22) 陸游『入蜀記』卷3（文淵閣『四庫全書』本）。

の学者に次のような指摘がある。宋元代に入り、中国経済の発展は、漢・唐の「三河（河内・河東・河南）を枕にして草原に向き合う」方向から「東南を枕にして海外に向き合う」方向へと歴史的な転換を遂げた。つまり、閉じられた自然経済から開かれた商品経済へと移行したのである、と。南宋こそはこの一大転換の最も重要な時期であろう。もしこの趨勢が続いていれば、中国は世界で最も早い海洋大国となったであろう。残念ながら明中期以降、長期にわたり海禁が実施されて海洋の道は絶たれ、「こうして中国は再び西北の草原を向いた内陸国家へと軌道を再修正したのである。」<sup>24)</sup>

このほか、南宋の経済制度と税制の変遷、そしてそれらの後世への影響について触れておきたい。

まずは紙幣の広範な使用についてである。世界で最初期の紙幣とされる交子の登場は北宋であるが、当時鉄銭を使用していた四川において通用していただけで、範囲が限られ、流通量も多くはなかった。南宋に入ると、会子に代表される紙幣は各地で使用され官吏の俸禄、士卒の食料や給料、租税ですら一部は会子で支払われた。これより、「硬貨と併用され、二度と廃止されなかった（遂与見緡並行、不可復廢矣）」<sup>25)</sup>のである。理宗の時に、最後に発行した両界会子を期限なく流通させるよう命じた。これにより、会子は現在の紙幣とほぼ同じ状態で用いられたのである。金元で使用された交鈔は、南宋の制度に倣って印刷し流通させたものである。

次に、土地所有に関する「魚鱗図」の出現についてである。紹興年間に行われた経界法とは、官田、民田の区別なく一律に、持ち主の姓名・土地面積・境界線・丘段・土地の来歴を記した「砧基簿」を作成するもので、これには地形図が付された。その地形図は端平元年（1234）に「魚鱗図」と称され<sup>26)</sup>、明代の「魚鱗図冊」の先駆となった。近代の土地制度でも活用された「魚鱗図」は、地主の脱税のための虚偽報告を防ぎ、農民の土地所有権を保障するのに有効であった。

最後に税制がもたらした重大な変化についてである。この変化は大きく二つの方面にまとめられる。一つは、人頭税の漸進的解消である。五代から北宋にかけて、四川を除いた中国南方にはいわゆる「身丁銭」という人頭税が存在した。南宋に入って、各地の身丁銭は続々と免除され、もしくは田租に組み込まれていった。一例を挙げると、紹興3年（1133）8月に高宗は「湖南の人頭税は、三分の二を民田から、残りを戸籍の人数から徴せよ（湖南丁米三分之二均取于民田、其一取之丁口）」<sup>27)</sup>と命じている。同5年3月には「道州の人頭税は、請願を容れて従来通り田畑にかかる（道州丁米、依旧田畝上均敷、用本州請也）」と詔している。このような人頭税を田租に替える現象は、当該地域が戦乱の被害に遭って成人男子が激減したことと密接に関係している。紹興32年5月、朝廷は知湖州である陳之茂の要請に応え、詔を下して湖州の人頭税額を絹五千匹に定め、以降「人口が増えても税を追加しない（不以添丁而増賦）」<sup>28)</sup>ことを決めた。この決定は他の地区の人頭税徴収に多大な影響を与えた。人民の負担を軽減したこの政策は、封建的政府の労働者に対する人身の束縛を一定程度緩和したであろう。南宋期には陶磁器生産や精錬等に従事した賃金労働者が多数存在し、ある学者は資本主義の萌芽を南宋に見る観点を示しているが、それはこの人頭税の軽減・免除とも結びつくであろう。もう一つは、労役内容の合理化である。南宋後期、地方では税制の煩雑さを利用して胥吏が不正を働き、結果人民の負担が極めて大きくなっていった。よって地方政府は労役や様々な雑税を「物力（土地を主とする家産）」によって徴税額を定め、「官に税の不足なく、民に重税なし（官無虧賦、民無重徵）」<sup>29)</sup>という状況を実現した。労役を完全に田租に組み入れて徴収した地方もあった。これらの方法は、明代の「一条鞭法」や清代の「攤丁入畝」の雛形であることは間違いない。南宋の税制改革は、後の明

24) 葛金芳「大陸帝国与海洋帝国——兼析中国伝統社会的運行軌跡」（『新華文摘』2005年第5期、第64-5頁）。

25) 李心伝『建炎以来朝野雜記』（以下『朝野雜記』と略称）甲集卷16「東南会子」（中華書局点校本、2000年、363頁）。

26) 杜範「常熟縣版籍記」、『清獻集』卷16（文淵閣『四庫全書』

本）。

27) 『宋史』卷27、高宗本紀（506頁）。

28) 『朝野雜記』甲集卷15「身丁銭」（327頁）。

29) 『景定嚴州統志』卷2「稅賦」（『宋元方志叢刊』所収、中華書局、1990年、4366頁）。

清にも通じる重要な意義を持つのである。

### 三 中華民族の至宝とも言うべき、燦然たる南宋文化

史学の大家である陳寅恪氏は、1940年代初めに既にこう指摘している。「中華民族の文化は数千年の変遷を経ているが、その極致は宋代にある。以降は段々と衰えているが、いずれまた振興しよう。」<sup>30)</sup> また、著名な歴史家の鄭広銘氏は、「宋代は我が国の封建社会における最高段階である。両宋の間に発達した物質文明と精神文明のレベルは、封建社会の中国史全体においても空前絶後の高さだと言えよう」<sup>31)</sup> と述べている。彼らの指摘は宋代全体にかかるものであるが、もし南宋が存在しなければ、宋代文化のこのような継承を経た発展はなかったであろう。これを要するに、彼らの言う宋代においては、南宋こそ眼目なのである。南宋の成立が、以降800年間続いた中国文化の重心の南遷を決定づけたことはもはや学界の常識であると言えよう。

靖康の変以降、北方、とりわけ開封一帯に生活していた多数の儒学者や文人は次々に高宗に随って南下した。その中には楊時・尹焞・胡安国・呂本中等の二程の弟子や孫弟子に当たる儒学者や、陳与義・朱敦儒・曾幾・李清照等の詩人や文学者がいる。また、ここには米芾の子の米友仁や蘇漢臣・李唐・李迪等の画家も含まれる。さらには宮廷楽師や様々な技芸を有する者もいたであろう。以降も少なからぬ文化人が北から南へと移動したが、彼らの学術思想や文学・芸術の才能は、師から弟子へ受け継がれ、また南方の文化と融合して燦然たる南宋文化を形成したのである。

まず、理学の形成と後世への影響に触れねばなるまい。南宋初めの紹興・乾道年間に理学は形成され、朱熹・張栻・呂祖謙・陸九淵の四大理学者が登場した。彼らは理学の代表人物であり傑出した教育者でもあるが、また儒家の「仁政」を体現した官僚でもあった。とりわけ程朱学を集大成した朱熹は、孔孟以降最も偉大な儒学者として位置づけられる。理宗に正式に認められてから清末まで、理学の影響の大きさに匹敵する思想はないであろう。その思想に限界はあるものの、もし歴代統治階級や偽道学者の曲解によらず、腐れ儒者の乏しい見識によらなければ、理学者が提唱した国家を至上とし、民を本とする精神はより多くを發揮したであろう。陸九淵の心学は、理学の一派として実体論と認識論の観点から朱熹の道学と激しく対立したが、これは後の陽明学へと繋がっていくのである。南宋前期には、激しく複雑な階級そして民族の問題に刺激を受け、商品経済の発達を背景として実利を追求する儒学の一派、浙東事功学派が登場した。その中には葉適を代表とする永嘉学派、陳亮を代表とする永康学派、呂祖謙を代表とする金華学派がある。葉適は実利の追求を提示し、政治の具体的実践を主張して、仁義と実利が相容れぬものとする観点に反対し、「国家の力を以て商人を支援し、貨幣を流通させる（以国家之力扶持商賈、流通貨幣）」<sup>32)</sup> ことを要求した。このような思想は、北方の失地を恢復すべしという人々の願望を反映しており、経済発展がその思想の基礎を固めて後世にまで影響を及ぼした。改革開放以降、この地の民間経営経済は雨後の竹の子のごとく成長し、人々から「温州モデル」と評されるに至った（永嘉は浙江温州）。このような現象に、800年前の事功の学の影響を認めてもよいであろう。

次に特筆すべきは、学教教育の隆盛が、文化の普及を力強く推進したことである。南宋の学校は北宋同様、中央官学・地方官学・書院・私塾や村塾の四つに分類できる。科学試験を求心力として、これらの学校は南宋期に大きく発展した。他はひとまず措き、一般民衆に最も密接な私塾について言え

30) 陳寅恪『金明館叢稿第二編』(三聯書店、2001年、245頁)。

32) 葉適『習学記言序目』卷19「史記 平準書」(文淵閣『四

31) 鄭広銘「關於宋史研究的幾個問題」(『社会科学戦線』

庫全書』本)。

1986年第2期)。



ば、その数が増大しただけでなく、様々な形式があった。後世の教育に最も大きな影響を及ぼした『三字経』は南宋に編纂されている。臨安府は「一本の路地ごとに一、二か所、学生の声が至る所で聞こえてくる。郷試の年には、合格した者、太学に受かった者もいた（每一里巷須一二所、弦誦之声、往往相聞。遇大比之歳、間有登第、補中舎選者）」<sup>33)</sup>とあるように、私塾が最も充実した地域であった。新安(安徽歙県)は山間部であったが、「村落田野から遠山深谷まで、人民の住む所、みな学問をした(自開邑田野以至於遠山深谷、居民之处、莫不有学)」<sup>34)</sup>南宋の学校教育の充実、文化の普及を推し進め、饒州(江西鄱陽)では、「父兄たる者は子や弟の文雅でないことを罪に思い、母妻たる者は子や夫の学がないことを恥に思う(為父兄者、以其子与弟不文為咎、為母妻者、以其子与夫不学為辱)」<sup>35)</sup> 気風を確認できる。北宋の広南東西路では、地方試験合格者は少なくなかったが、最終的には一、二人進士に登第すればよい方であった。しかし、200年後の南宋宝祐4年(1256)には、『登科録』に拠れば両路の進士登第者数はそれぞれ32人、34人となっており、歴然たる進歩を遂げている。南宋以前に教育を受けられる者は地主や官僚、大商人の子弟に限られていたが、南宋に至って私塾等の学校が普及した結果、その対象は平民全体へと拡大したのである。

第三に、史学が隆盛を極め、後世の宋代史研究に十分な史料を提供していることである。南宋の言論統制は厳しくなく、政治や先例を熟知し、国家と民族に強い責任感を持った士大夫はその多くが史学研究に注力し、歴史上の経験と教訓を総括して統治集団の参考とした。これに加え、南宋の科挙周辺層とも言うべき読書人層はそれ以前とは比べられないほどに増加していたため、史書の需要も大きかった。多数の読書人が著作や出版、書籍販売を生計の手段とし、南宋史学は隆盛を極め、現存する史学の著作、とりわけ宋本朝の記録は北宋を遙かに上回っている。注意すべきは、現存する史料は南宋史学者たちが靖康の変の国史・実録・会要等の散逸を乗り越えて再び収集し編集したものだということである。この他、南宋史学者の歴史認識は厳格で、考察も仔細で、後世まで用いられる紀事本末体や綱目体、学案体を創出した。総じて、南宋史学の成果は中国史学史上に燦然と光を放っていると言えよう。

第四に、公私の蔵書の充実である。国家の蔵書数は、その国家の文化的蓄積の大きさを端的に示しているだろう。南宋は蔵書が飛躍的に隆盛した時代であり、官民を問わず書籍の収蔵を重んじた。まず国家の蔵書については、靖康の変での損失は甚大であったが、南宋政府は手を尽くして書籍を収集し、また史官を組織して大規模な編纂を行って、秘書省の蔵書の充実を図った。嘉定13年(1220)、蔵書量は59,429巻に達しているが、これは北宋慶歴元年(1041)に編まれた『崇文総目』の30,669巻の倍近い数量である<sup>36)</sup>。個人蔵書家について地域別にみていくと、浙江が最も多く43、以下江西の27、福建の22、江蘇の16、四川の15、安徽の6と続く。これに山東・河南から南下した蔵書家7を加えれば、総計136の蔵書家が確認される<sup>37)</sup>。当時の著名な蔵書家として、鄭樵・陸宰・葉夢得・晁公武・陳振孫・尤袤・周密等が挙げられる。紹興13年(1343)、朝廷が臨安に秘書省を再建しようとした際、陸游の父である陸宰は13,000巻の図書を献上している<sup>38)</sup>。呉県から烏程(浙江湖州)に居を移した葉夢得は、同じ烏程の賀氏と共に蔵書量が10万巻を超えていた。これは南宋の最も蔵書量が多い例で、明清期にも類例はなかなか見当たらないであろう。南宋末の周密は、自身の蔵書について「40,020巻余りと、古代からの金石1,500種」<sup>39)</sup>と述べている。これらの蔵書家は、

33) 『都城紀勝』「三教外地」(文淵閣『四庫全書』本)。

34) 趙滴「商山書院学田記」(『嘉慶休寧県志』巻1)。

35) 洪邁『容齋四筆』巻5「饒州風俗」(上海古籍出版社標本本、1996年、666頁)。

36) 王応麟『玉海』巻52「芸文、淳熙中興館閣書目・嘉定統書目」。

37) 袁同礼「宋代私家蔵書概略」(『図書館学季刊』第2巻第2期)

を参照。

38) 『嘉泰会稽志』巻16「求遺書」(『宋元方志叢刊』所収、中華書局、1990年、7023頁)。

39) 周密『齊東野語』巻12「書籍之厄」(中華書局点校本、1983年、218頁)。

また一流の学者でもあり、彼らは経学・文学・史学・目録学・校勘学・考証学・金石学等の方面にそれぞれ造詣が深い。晁公武『郡齋讀書志』や陳振孫『直齋書錄解題』は今でも著名な目録学の著作であるし、周密は多才多芸な学者であった。

第五に、文学や芸術の繁栄についてである。宋代を代表する文学ジャンルである詞は北宋に流行し、南宋には民族や階級の葛藤の刺激を受けて最盛期に入った。唐圭章氏が編纂した『全宋词』に拠れば、本籍地や活動時期が確認できる873の詞人のうち、北宋は227人で全体の26%、南宋は646人で74%を占める。南宋は実に北宋の3倍の多さで、著名な詞人に李清照・朱淑真・朱敦儒・張孝祥・張元幹・辛棄疾・陸游・姜夔・吳文英・劉克莊・周密・張炎・汪元量等がいる。彼らの作品は思想性にせよ芸術性にせよ、後世によく知られるものばかりである。辛棄疾は南宋の偉大な愛国詞人である。彼は若い時に山東で金軍と死闘を繰り広げ、敗れた後南宋に帰順して官僚となったが、一時も中原恢復の志を忘れることはなかった。彼の作風は婉曲にして清麗なものもあれば、悲憤慷慨に満ちたものもあり、人を感化させる力が強く、豪放詞の代表格にして、南宋詞壇の第一人者であろう。宋詩の地位は唐代には及ばないとされるが、南宋詩の数量と作者数から言えば、遙かに北宋を凌いでいる。北方から南下してきた曾幾や陳与義、中興四大詩人と称される陸游・楊万里・范成大・尤袤、永嘉（浙江温州）の四靈こと徐照・徐璣・翁卷・趙師秀、江湖派を代表する戴復古・劉克莊、南宋滅亡後に遺民として詩を作った文天祥・謝翱・方鳳・林景熙・汪元量・謝枋得等、彼らは南宋の中でもとりわけ優れた詩人たちである。その中でも陸游は南宋を代表する詩人である。彼は9,200首余りを今に伝える多作の詩人としても知られるが、その内容の多くは彼の中原恢復を希求する強い思いが反映されている。陸游の辞世の詩「児に示す」には、「死し去れば元より知る 万事空しきを、但だ悲しむ九州の同じきを見ざるを。王師 北のかた中原を定むる日、家祭 忘る無かれ 乃翁に告ぐるを（死去元知万事空、但悲不見九州同。王師北定中原日、家祭 無忘告乃翁）」と、最後まで強い愛国精神を詠い、800年間ずっと中国人民が国家を統一し民族が復興するために粉骨砕身するのを鼓舞し続けてきた。陸游こそは中国史上最も偉大な愛国詩人と言ってよいであろう。この他、南宋の絵画・書道・彫刻・音楽舞踊や戯曲等、それぞれが大きく花開いたが、紙幅の都合によりここでは詳述はしない。かくのごとく燦然たる南宋文化は、中華民族の至宝となったのである。

南宋文化は王朝の滅亡とともに断絶することなく伝えられたが、これにも当然歴史的原因が指摘できる。南宋滅亡以降、臨安府が都の地位を失ったのとモンゴル貴族の強制によって、再び大規模な人口の流動が起きたのである。一部の南方人は強制的に北方に移住させられた。例えば、至元12年（1275）7月、元軍が建康府を占領してまもなく、クビライは江南に配下を派遣し、「儒者・医者・僧侶・道教徒・占い師等を探させた（搜訪儒・医・僧・道・陰陽人等）」<sup>40)</sup>とある。翌年春、元軍は臨安府に入り、南宋の君臣を大都に送ると同時に、太学の学生も大都へと行かせた。同22年正月に再び「江南の楽師800人を大都へと移らせた（徙江南樂工八百家于京師）」<sup>41)</sup>以降、杭州に居住していた士大夫や文化人及びその子弟は、生計のために続々と各地へと移住していった。彼らは文化の媒体として、先進的な南宋文化を全土へ伝播させ、当地の文化と融合させる役割を果たしたのである。クビライは「漢法」を普及させ、これらの文化の伝播と融合を促進した。「近代の中国文化は、南宋文化をその揺籃とする」<sup>42)</sup>と断言する学者すらいるが、十分に説得力を有するであろう。

40) 『元史』巻8、世祖本紀（169頁）。

41) 『元史』巻13、世祖本紀（272頁）。

42) 『中国水利地理史研究』（303頁）。原文は「南宋に至って、杭州は名実共に江南帝国の首都となり、而して這はその滅

亡に至る間、百五十年に亘って続いたものである。そして近世文化の揺籃地としての輝やける地位も、亦此の間に育成されたのである。」

## 四 科学技術の傑出した成果とその世界への影響

南宋は古代の科学技術発展の歴史において最も輝かしい時代である。イギリスの学者李約瑟（ジョゼフ・ニーダム）は「科学技術史の研究者として言えば、唐代は宋代の重要性にはるかに及ばず、この二王朝の雰囲気は異なる。唐代は人文主義で、宋代はより科学技術に重点を置いている。……中国の文献に具体的な科学技術の記述を探すたびに、応用化学か純粋科学かに関わらず、その焦点は宋代にあることが多い<sup>43)</sup>」と指摘している。これは間違いではないが、北宋と南宋とに分けて考えた場合、如上の指摘はより南宋に特化したものとして捉えられるべきであろう。三大発明の羅針盤・火薬・印刷技術に限っても、それらは南宋に大きく進歩した広く応用されたものである。

まず、羅針盤の発明について。羅針盤は航海に用いられ、北宋末頃の記述に現れる。磁針を水面に浮かべて方位を知る「水浮法」が一般的であったが、これは水面が揺れることで精確さを損なう欠点があった。南宋期には、羅針盤は簡単な方位を知るものから、仔細に方位を確認できるものへと発達した。呉自牧『夢梁録』巻12「江海船艦」には「〔船が大海の中を航行して〕風雨で暗い時、羅針盤だけを頼りに進む。船長がこれを管理し、乗船する全員の安全に関わるものなので、わずかな狂いもないようにする（風雨晦冥時、唯憑針盤而行、乃火長掌之、毫釐不敢差誤、蓋一舟人命所繫也）」とあるが、「わずかな狂いもないようにする」という記述から、当時の羅針盤の精確さが窺えよう。南宋後期には精確な羅針盤が発明され、航海に大いに運用されていたのである。この羅針盤が西伝して大航海時代をもたらし、世界を一変させたことについて贅言は要さないであろう。

次に、砲型火器の登場について。唐代には既に火薬が軍事に用いられており、北宋後期に編まれた『武経総要』には、火炮・火球・火箭・鉄嘴火鶴・毒薬煙球等多数の火薬を用いた武器が記載されている。これらには燃焼・爆破・火あぶり・毒を放つ・煙幕等の作用があり、人力での投擲あるいは弓矢で発射された。これらの火器は直接の殺傷力は低く、応用の範囲も限られていた。火薬武器の大規模な使用と普及が見られるのはやはり南宋に入ってからで、砲型の火器が発明されている。紹興2年（1132）、陳規が徳安（湖北安陸）の地方官であった際、竹を銃身に用いて火炎を噴射する「火槍」を発明した。これは世界で最初期の原始的な砲型火器であろう。南宋後期にはこれを改良した「突火槍」が開発され、「大きな竹を銃身とし、内側に火薬弾を設置し、火をつければ炎が消えた後に火薬弾が発射される。砲のような音の大きさで、遠く百五十歩先にも聞こえるほどであった（以鉅竹為筒、内安子窠、如燒放、焰絶然後子窠發出、如砲声、遠聞百五十余歩）」<sup>44)</sup>という。弾丸を用いた遠距離攻撃が可能な砲型火器の先駆と位置づけられよう。

最後に、活字印刷術の運用について。北宋慶歴年間（1041-48）に畢昇なる人物が活字印刷を発明しているが、同時期の他の史料にそれを運用した記述が確認できず、膠泥活字が実際に印刷に適するかどうかは長らく学界でも議論されてきた。しかし南宋の記録には、紹熙4年（1193）、周必大が畢昇の活字印刷術を用いて自身の『玉堂雜記』を出版した事例<sup>45)</sup>があり、膠泥活字が実用に耐えることが確認できるのである。

この他、農学・数学・医薬学や紡績・陶磁生産・造船・冶金・製紙・醸造・地学・水利・天文暦法・武器製造等の様々な方面で飛躍的な発展を遂げているが、紙幅の都合でここでは省略する。

43) 李約瑟『中国科学技術史』〔導論〕（中訳本、北京科学出版社、1990年）。

45) 周必大「与程元成給事札子」、《周益国文忠公集》巻198（文淵閣『四庫全書』本）。

44) 『宋史』巻197、兵志（4923頁）。

## 五 中華民族の精神的財産たる、国家統一と民族独立を死守する南宋の精神

南宋153年の歴史において、女真（金）とモンゴル（元）に相次いで侵略され、外患は絶えることがなかったと言ってよい。これに対し南宋の軍隊と人民は勇敢かつ粘り強く、不撓不屈の戦いを展開していった。とりわけ南宋後期に相対したモンゴル軍は強敵で、当時世界で最も強大な軍隊であった。モンゴル軍は20年前後の間に、西夏と金を滅ぼし、それと前後して三度の大規模な西征を敢行し、中央アジア、西アジア、ロシア等の広大な領域を征服した。その先鋒は中央ヨーロッパのドナウ川流域にまで達していた。モンゴル鉄騎の向かう所敵なく、破竹の勢いで、全世界がモンゴルのために憂える事態となった。南宋の軍事力は大きくはなかったが、その充実した経済力、堅固な文化的蓄積及び多くの軍人や民衆が抱く敵愾心を背景に、滅亡に至るまで45年も粘り強く抵抗を続けた。これは世界のモンゴル軍に対抗する歴史において、一つの奇跡と呼べるのではないだろうか。

長きにわたる侵略者との闘争において、不屈の抗戦将軍や、愛国志士、民族の英雄が次々に登場し、多くの感動的な場面が生まれた。彼らの鮮血と生命を礎に、国家の統一と民族の独立を死守せんとする愛国精神、即ち南宋の精神が作り上げられた。抗金の英雄岳飛、抗元の名臣文天祥はその代表であり、中華民族の歴史上最も名高い民族の英雄である。南宋は滅んでしまったが、彼らの英雄的気概、献身の精神、そして国家と民族に対する真情は、今に至るまで人々を鼓舞し、中華民族の心の声となっている。我々の国家が危機に陥るごとに、岳飛「滿江紅」詞は国土の北から南まで響き渡り、「我が山河を奪回せん」という主張が祖国の大地にとどろくであろう。国家が侵略され、分断されるたびに、陸游の愛国の詩篇が心の中にこだまし、戦いへの号令となるであろう。義憤の志士が国家と民族のために同志の屍を越えて戦いながらも、挫折し囚われの身となるたびに、文天祥の「人生古自り誰か死無からん、丹心を留取して汗青を照らさん（人生自古誰無死、留取丹心照汗青）」の句や、「孔子は仁を成すと言ひ、孟子は義を取ると言つた。義を尽くしてはじめて、仁に至るのである。聖賢の書を読むのは、何を学ぶためなのか。現在もこれから先も、恥の無いように（孔曰成仁、孟曰取義。惟其義尽、所以仁至。読聖賢書、所学何事。而今而後、庶幾無愧）」<sup>46)</sup>という言葉が耳によみがえり、人々を犠牲をいとわず戦いに赴かせるであろう。これらの南宋の精神は永遠に中華民族の最も尊い財産であり、中国人が世界に伍する必要条件であり、精神的支柱なのである。

以上を要するに、南宋は一つの地方政権にすぎなかったが、それでも北宋の5分の3の国土、6,000万の人口を擁し、海外60以上の国家と交易した大国であった。南宋の成立は、四川を含む秦嶺・淮河以南の地の人民を女真族の苦役に従事させず、当地の社会経済を継続的に発展させ、先進的な宋の文化と科学技術に繁栄していく土台を与え、我が国の経済的・文化的重心の南遷を完成させた。もし南宋が存在しなければ、中国社会の経済と文化は著しく後退あるいは停滞し、見るも無惨な結果になっていたであろう。そして、南宋の人々が侵略への抵抗の中で築き上げた精神は、今もなお中華民族の立国の基礎であり、すべての外圧に打ち勝ってきた大きな精神力となっているのである。

もちろん、時代の制限を受けた南宋社会にも様々な弊害が存在する。とりわけ武人の制御は、彼らの地位の低下、軍事力の不振につながり、後世の尚武精神の涵養に悪影響であったことを、最後に指摘しておきたい。

---

46) 宋史』巻418、文天祥伝（12540頁）。